



或時雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森界隈の陰しい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪に囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒を下しました。もう鼠色のペンキの剥げかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯の明りで見ると、印度人マテイラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。

マテイラム・ミスラ君と云えば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の独立を計っているカルカッタ生れの愛国者で、同時に又ハッサン・カンという名高い婆羅門の秘法を学んだ、年の若い魔術の大家なのです。私は丁度一月ばかり以前から、或友人の紹介でミスラ君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあっても、肝腎の魔術を使う時には、まだ一度も居合せたことがありません。そこで今夜は前以て、魔術を使って見せてくれるように、手紙で頼んで置いてから、当時ミスラ君の住んでいた、寂しい大森の町はずれまで、人力車を急がせて来たのです。

私は雨に濡れながら、覚束ない車夫の提灯の明りを便りにその標札の下にある呼鈴の鈕を押しました。すると間もなく戸が開いて、玄関へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人の御婆さんです。

「ミスラ君は御出でですか」

「いらっしゃいます。先程からあなた様を御待ち兼ねでございました」

御婆さんは愛想よくこう言いながら、すぐその玄関のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晚は、雨の降るのによく御出ででした」

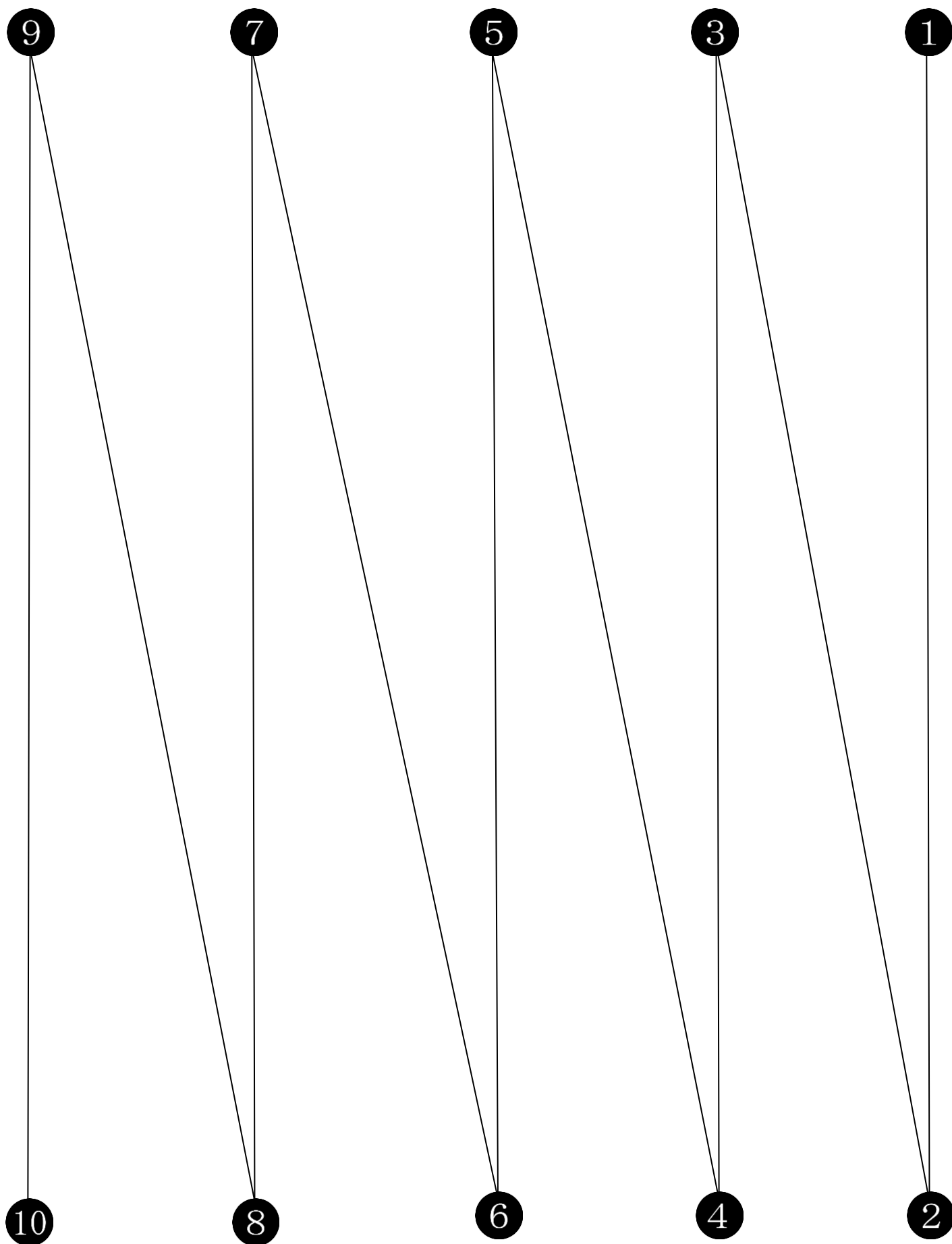
色のまっ黒な、眼の大きい、柔な口髭のあるミスラ君は、テエブルの上にある石油ランプの心を撚りながら、元気よく私に挨拶しました。

「いや、あなたの魔術さえ拝見出来れば、雨位は何ともありません」

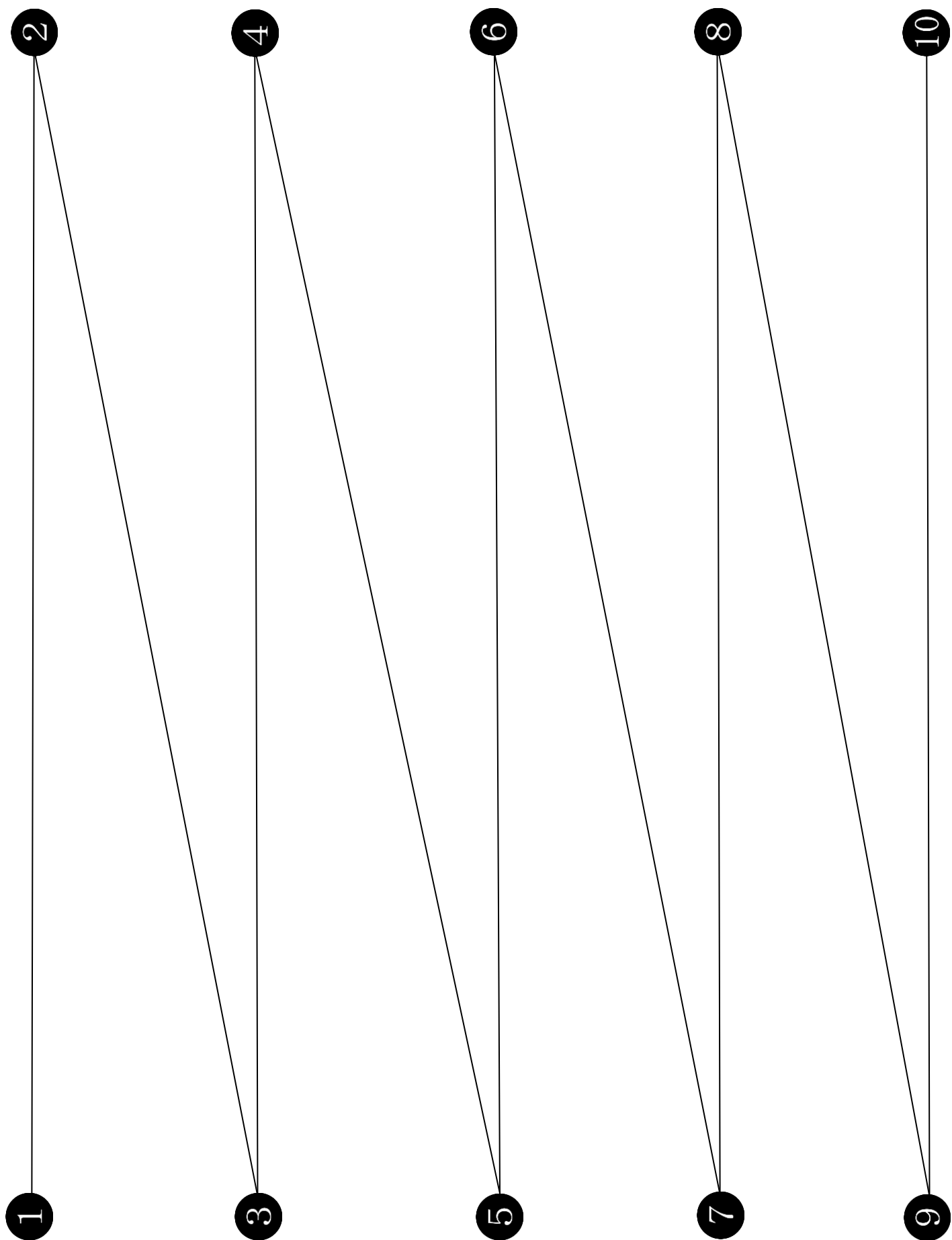
私は椅子に腰をかけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰気な部屋の中を見廻しました。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテエブルが一つ、壁側に手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ――外には唯我々の腰をかける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、縁へ赤く花模様を織り出した、派手なテエブル掛でさえ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目が露になっていました。

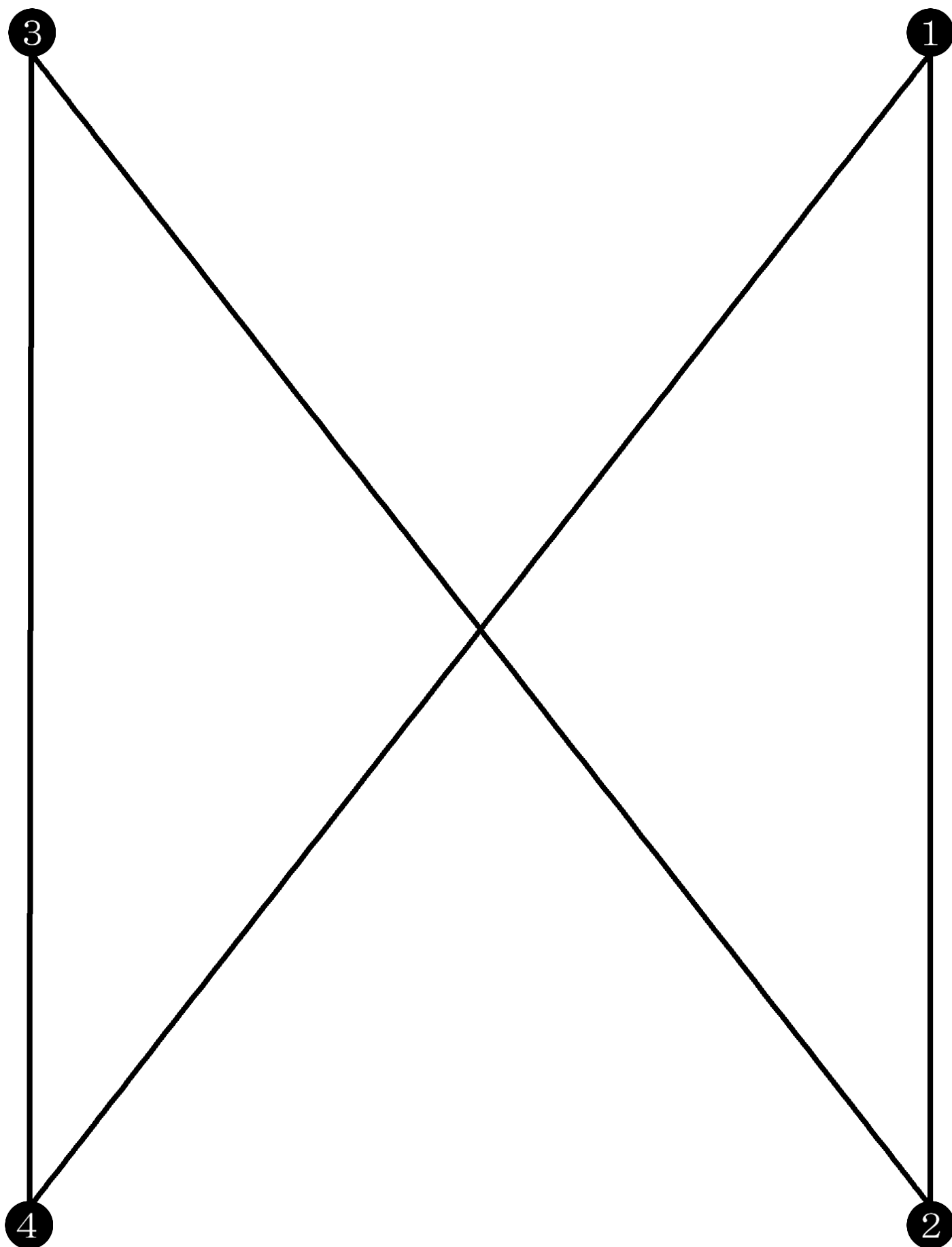
# 眼筋トレーニングシート (上下)



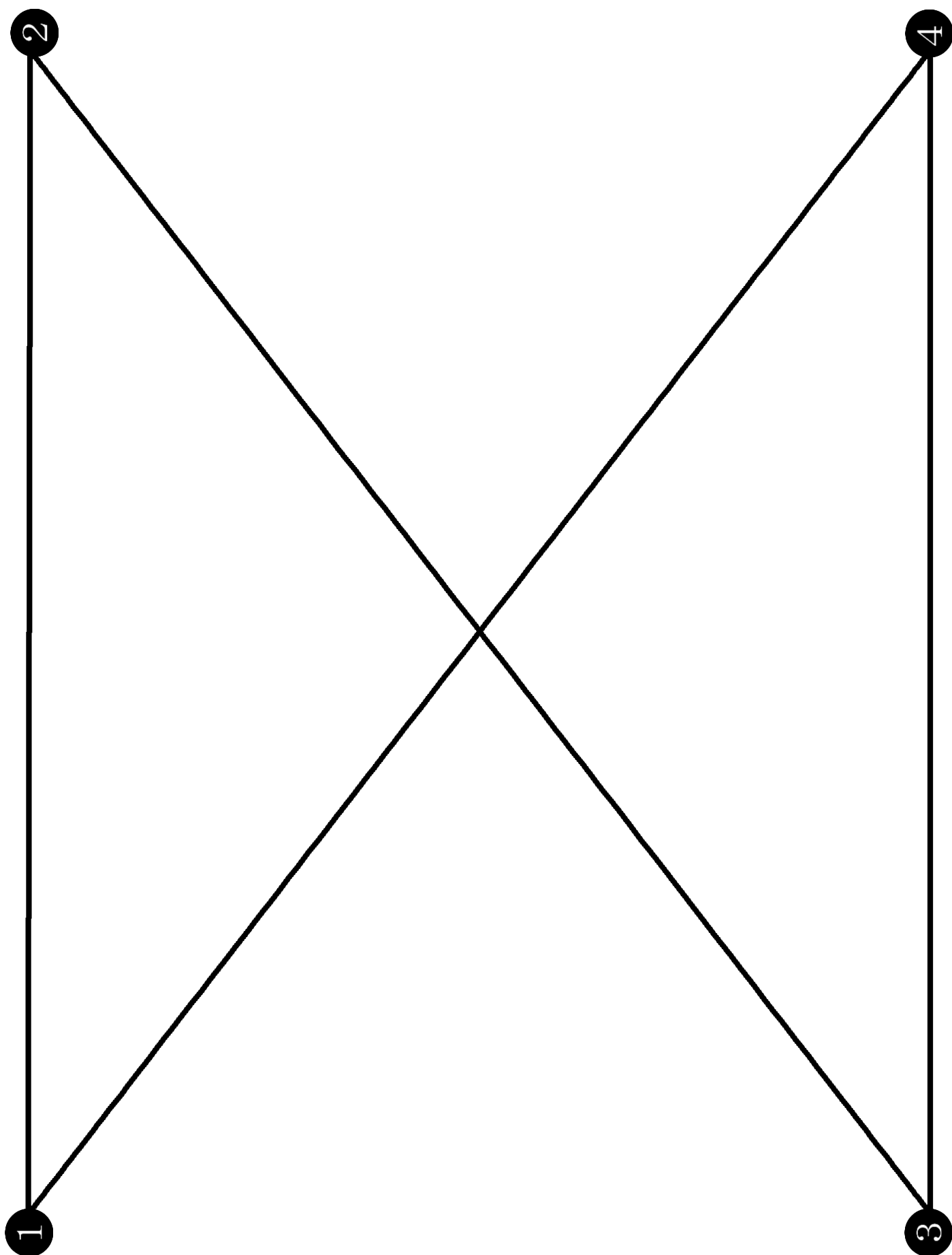
# 眼筋トレーニングシート (左右)

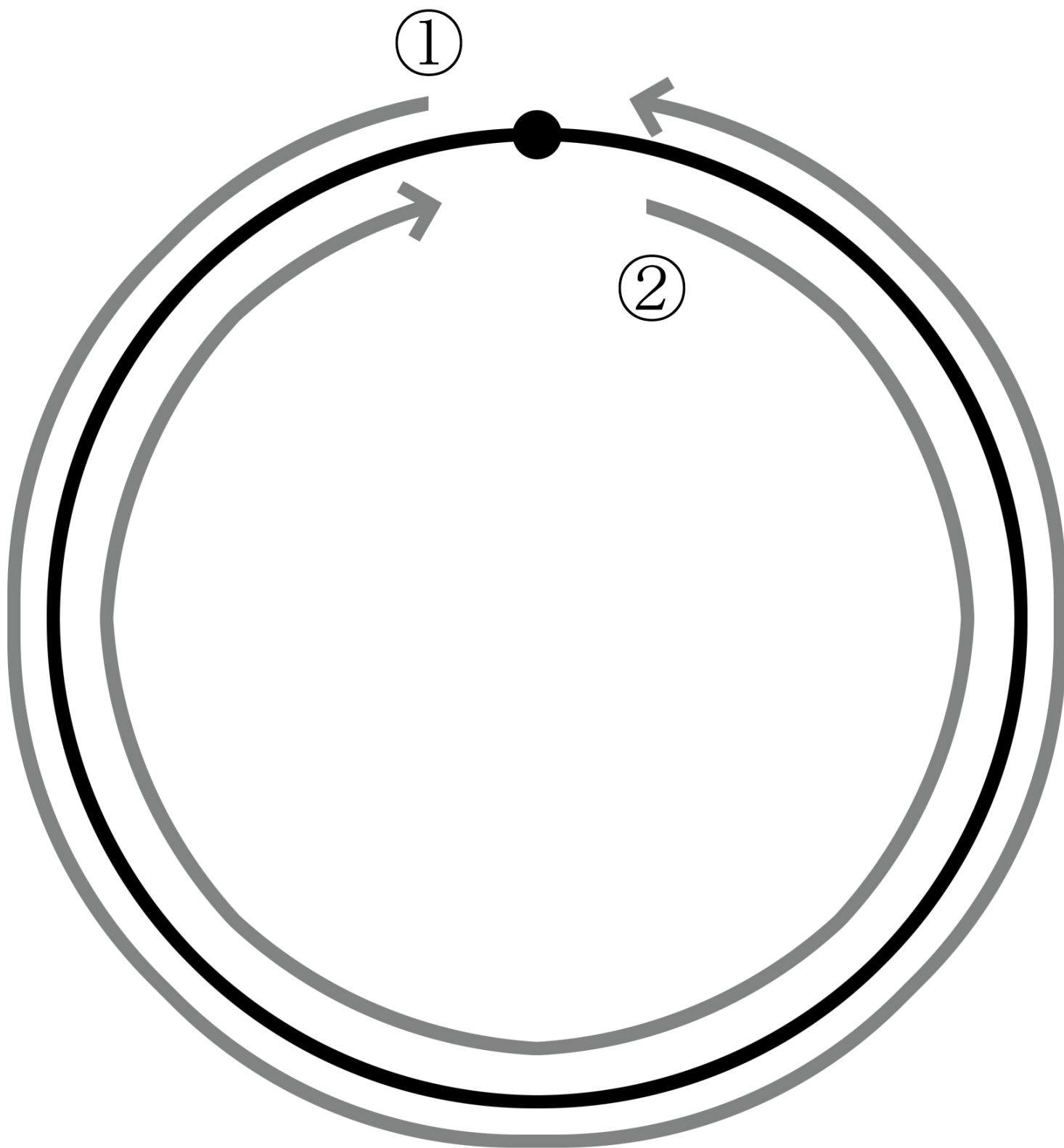


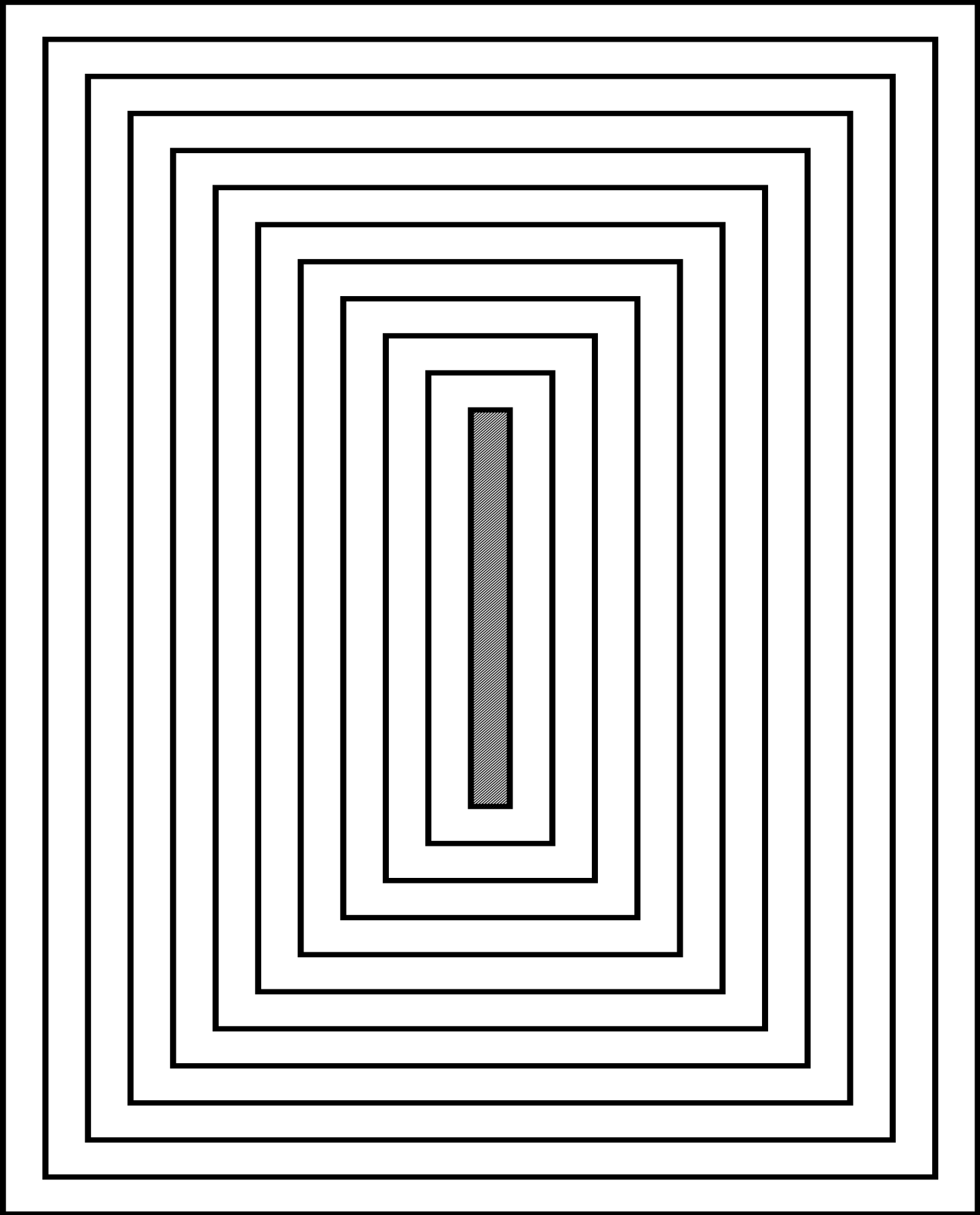
# 眼筋トレーニングシート (たて対角)



# 眼筋トレーニングシート (よこ対角)













## 2 点読みトレーニングシート (文字)

- ◆ 或時雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森界限の陰  
◆ しい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪に囲まれた、小さな西洋館の  
◆ 前に梶棒を下しました。もう鼠色のペンキの剥げかかった、狭苦しい玄関  
◆ には、車夫の出した提灯の明りで見ると、印度人マテイラム・ミスラと日  
◆ 本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。
- ◆ マテイラム・ミスラ君と云えば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少  
◆ くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の独立を計っているカルカッ  
◆ タ生れの愛国者で、同時に又ハッサン・カンという名高い婆羅門の秘法を  
◆ 学んだ、年の若い魔術の大家なのです。私は丁度一月ばかり以前から、或  
◆ 友人の紹介でミスラ君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろ  
◆ いろ議論したことがあっても、肝腎の魔術を使う時には、まだ一度も居合  
◆ せたことはありません。そこで今夜は前以て、魔術を使って見せてくれる  
◆ ように、手紙で頼んで置いてから、当時ミスラ君の住んでいた、寂しい大  
◆ 森の町はずれまで、人力車を急がせて来たのです。
- ◆ 私は雨に濡れながら、覚束ない車夫の提灯の明りを便りにその標札の下  
◆ にある呼鈴の釦を押しました。すると間もなく戸が開いて、玄関へ顔を出  
◆ したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人の御婆さんです。  
◆ 「ミスラ君は御出でですか」
- ◆ 「いらっしゃいます。先程からあなた様を御待ち兼ねでございました」
- ◆ 御婆さんは愛想よくこう言いながら、すぐその玄関のつきあたりにある、  
◆ ミスラ君の部屋へ私を案内しました。
- ◆ 「今晚は、雨の降るのによく御出ででした」
- ◆ 色のまっ黒な、眼の大きい、柔な口髭のあるミスラ君は、テーブルの上  
◆ にある石油ランプの心を撚りながら、元気よく私に挨拶しました。
- ◆ 「いや、あなたの魔術さえ拝見出来れば、兩位は何ともありません」
- ◆ 私は椅子に腰をかけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰気  
◆ な部屋の中を見廻しました。
- ◆ ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテーブルが一つ、壁側に手  
◆ ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ――外には唯我々の腰をか  
◆ ける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけ  
◆ た物ばかりで、縁へ赤く花模様を織り出した、派手なテーブル掛でさえ、  
◆ 今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目が露になっていました。